

諸君はウルトラに依つて
 どんな決心をしますか？

1929年・FEV

ウルトラ

明日への旅行を
 知る爲めの冊子



新しい組織に依つて
 新しい計画に依つて
 新しい脱皮に依つて

◆毎年冬若くは春になると、私達は冊子を出す習慣になつてゐる。これは生理的現象としか考へることが出来ない。

◆であるが故に一九二九年度に於いてもこの新計畫を實行する、がウルトラは一九二七年度に於ける機械座の如く容易に解體しなだけの決心である。

◆であるが故に一九二九年度に於いて一九二九年度流行のジャアナリズムを應用することにした。

◆この冊子はみんな仕事をするかと云ふ理由それは以下の各頁に依つて理解さるべきものと信じる。

◆齊藤光二郎

科 學 の 奇 蹟
悲 し き 汽 船

◆折戸 彰 夫

ウルトラ・モダニズム
記 念・饗 道

◆近 藤 東

交 通 整 理 帖

◆春 山 行 夫

フランス・カルコ2章

◆犬 飼 稔

孤 獨

◆龜 山 巖

拜 星 教 に 就 い て
飾 畫

エスキース

詩 集『虚 無 と 白 鳥』

凝 結 器

新 イ ソ ツ プ 傳

メ モ ラ ブ ル ・ ラ リ イ
渡 邊 登

我々は誕生する

新らしい時間と

空間に生きよ!!!

科學の奇蹟

齊藤 光 二 郎

飛行機販賣店から一步を舗道へ踏みだしたとき青年外交員はガラガラと飛行機が屋上へ墜落するのを目撃しました。瞬間かれは血とナイフを幻覺し美しい妻とかれの部屋を幻覺し、そして今日からの職業に就て考へてみました。たつたいま飛行機販賣店の支配人から飛行機が一臺のトウキンダマシより廉くフオードより簡單に操縦がてきハンモックに乗るより安全であることを聞かされたばかりだつたのに！かれは昨日までの生命保険勧誘員に未練を感じました。それらのことはほんの一瞬の間にかれの顔から胸へサツとフラツシュしたのです。

アッ！飛行機はキリキリと再び空へ舞ひあがりました。かれははつとしました。神さま！美しい妻と新しい職業に祝福あれ。

悲しき汽船

甲板の乗客と岩壁の見送人の間に五色のテープが幾百條となく張られました見送人の手からテープがスルスルと汽船を送りだしました。テープの端までくだりだした見送人は急に名残おしくなつたので今度はテープをたぐり初めました。さしもの巨船も幾百條のテープにたぐりよせられて岩壁近くまでこりましました。このとき機関長はあはてふために全速力を命じました。驚くべし、テープは切れてしまひ汽船は。

汽船はアツと云ふまに地球の向ふ側へ姿をかくしてしまひました。

CRITIQUE

ウルトラ

モダニズム

折戸 彫 夫

僕等ウルトラ・モダニズムに感染した靈はあらゆる束縛から自由であるのだ。それが詩であれ評論であれ又は街角の簡密に映つた自分の影にささやいた獨語であれ、疾走する自動車窓から投げた、謝肉祭の紙玉の様な戀愛であれ——あらゆる生活の多元的方向に於て、又そこから蒸發する感情の多彩な發散に於てあくまでも僕等は傳統と約束と權威と鐵條網さから彼方に飛揚されてゐるのだ。僕等は青空を輕快な風に吹かれ、風船や氣球の様に涯しなく自由と高昇を愛してゐるのだ。それが眞であれ、嘘であれそこに僕等は價値の水準を置いては行かないのだ。

ただ行かんがために行くものこそ眞實の旅人なれ *Realistic traveler*

僕等の喜びはあくまでも明るく輕快であることだ。だから僕等はすこいスピードと、ジャズのように狂奔するテンポの輕さと、僕等の感情に少

しの重壓性をも與えない上、脚の氣薄さを愛好するのだ。一分間!!それは無限に悠閑だ。僕等は一秒を樂しもうてはいないか。そして来るべき時代は一秒の十分の一又は百分の一であるだらう。て僕は僕のエッセーを始めやう。間の抜けた英語に過ぎないではないか。君は僕にもとめません。君の言葉にはね。これで充分僕の思索は水素を發散してゐるのです。

2

戀と氣球とどちらがお好きです。『そりや勿論氣球だわ』頭の進んだお嬢さんだつたら間違もなく、きつとこうお答へにならしてやう。なぜならば上騰する氣球の方が戀よりも、もつと明るくもつと輕快なのですから、晴れ渡つたビルディングの青空を横きつて行くこそ自己體がいゝことなのです。本當ですとも。たゞそれだけで充分なのです。近代のスピードを愛する鋭い認知と明るい情緒は立體的で、そしてその上、それ自らの情緒のうちに透明な無數の投影を屈折する掛値のない寶石の心の様に多次元的です。分光器を仕掛けた急回轉するプロペラの様な心をなのです。一秒間に千回轉。僕は總て固定した動きのとれない固形感情を憎みます。瓦石の様な頑く、沈黙した心を。あくまでもフリウエントな、あくまでも明るい、あくまでも香ばしい朝の港に快帆船競争をイイジリな氣持で樂しもうてはありせんか。まつ白な螺旋の様に青空に上騰するバネ仕掛の雲の梯子の上で綱飛びでもいたしやう。

3

近代はスピードを愛します。シルクハットのバツカード殿が街の窓を覗いてゆく。白い襟飾が光ります。舞踏會に行くらしいです。結構です。猛烈なスピードが私達を喜ばせる。それは近代の審美感の王女の濫徴です。私は好みます疾走する哲學を———摩訶な自動車競争を。ただ明日の連力のためにです。そこでは固體が點に、點が羽の生れた線にまで發展する。そして終りに水蒸気の點に心よい香を散つてエバポレートするのである。でもそのカーブの奇麗だつた。私は

せつなを喜びます。一秒間の四分の一———花火の様にパチパチと心よい音をたてるフラッシュ・エ・バックの中の戀です。一瞬時に過去と未來とを透明な風の様に廻轉させる旋風機の様なジャヤッを。黒坊が窓から顔を出してゐる。タンバリンが笑つてゐる。瞬間の情緒です。ラオズの様に、ラヂオの様に———一秒間に七萬哩。

4

私は騒音を好みます。それは生活のラッシュ・ユアワの興奮劑です。シヨウ・ウィンドウの鏡の中に反響する都會の風景の不協和音がたましいに心よいテンポを。赤い旗が招いてゐる。過激派の兵隊さんです。近代思索の不協和音の獨白です。だが少しばかり耳障りに成つて來た様です。奥さん、昨夜は心よくお休みになれまして。お氣の毒です。古い傳統を食ふ高雅な奥さんのお心をわづらはすあまりに高すぎる不協和音です。北緯五十度か吹いてくゝに似た風です。奥さんの羽毛の蒲團をかき廻す。くしやみをなさいましたね。お風を召しはしませんか。キャビタリズムの優しい奥さん! 私はお二人に握手をしましやう。(混血兒の悲しさと誇りを心に抱いてです。)キャビタリズムの古風なマダムとそれから又赤い軍帽を冠つた過激派の獨裁官にも。少しばかり弾猛なブルドックの様な横顔だ。鋼鐵をやりましよう奥さんのためにです———(あたし過激派が石炭と鋼鐵を喰ふのが見たくつて)———結構です。マダムを食へて來たのです。香水の香も一緒に食べます。

5

野蠻人の嗅覺は遠方になりました。一哩も先に吠える獅子のたてがみを香わけます。近代人の嗅覺は多元的に鋭角で近距離です。自動車の速力がそれを補つて呉れるので心配はいりませんがね。一時間の後に君は五十哩彼方の奥さんの上衣のボタンの穴に萎れた花の香を嗅ぐだらう。ダイヤモンドを寶石の山に嗅ぎかける礦山技師です。ポケットの中の金貨を嗅ぎかける夜行列車の燕尾服を着込んだすりなのです。近代の窓の構造はそんな風に便利に出來てゐるのです。來年の流

行を喚びかける巴里の衣裳屋の番頭が向ふから歩いて来る。この巨人にお辭儀をしましょう。間の抜けた詩人だつて明日の戀人の手にある花の香を今から喚びかけること位はわけなく出来ますとも。——明日の天氣を晴雨計で喚びかける測候所のお醫者様。勿論それがうまう當らない所に近代の小兒病の隠し切れない喜悅があるのだ。彼の時代遅れの株屋でさへその全生涯の半ば以上を未來の綱渡りに生きてゐるのではないか。私達は私達の生の大部分を未來に發送して置きてゐる。現在では過去の80%以上の株券を未來は所有してゐるのですよ。私はこのさく取階級を喜びます。でも時計でも晝寝をしますよ。向ふの街角のデパートメント・ストアの時計臺のまつ白な大きな時計は丁度十二時間遅れて居ります。古風なアルジョアの奥さんたちがいつも歩いて居る街ですね。その通りです。それはひさびさの過去ですわ。四萬三千二百秒——あの花束をもつた男が海王星に着いた頃だ。それはあまりに

交通整理帖 近藤 東

汽 關 車

新編の大型なキヤビタル・レター

ここから『眞夏の夜の夢』一九二七年版を読み出さう

スチーム・ロウラア

大きな吸取紙器が、もう何もかも消してしまふ。

昨日の夢も

あの娘の聲音も……………。

青 バ ス

——ごめん下さい。夫人。これは青バスのせいです。若しも故意に踏んだと思召すなら、あなたはあまりにロマンチストであらつしや

自 動 車

も遠い過去ですね。私は現在を重じます。勿論未來の一部としてです傳統をじゅうりんしなすよう。この透明な褥子の答は未來を呼吸して居りますね。私達は水源地を未來に置きます。この様な水道は僕等にとつてはの上もなく便利であるのだ。自動車は猛烈な速力で明日の空氣を運んで来て僕等の石炭庫にあげて行く。

6

私は氣球にのつて空を横ぎる夢を夢みる。未來から未來へと——あくまでも明るく——あくまでも輕快にそしてあくまでも微知的に E T C ——それは四次元的なジャッヅの様な狂氣に満ちた喜悅なのです。飛びまはる「小兒病です」勿論です。現在も反「光線として」です。これは一體いつの時代の好みなのです。私はいたづらな小兒の様に赤い旗をもつて根屋の上で笑つてゐる。

オ・ホリオ氏新發賣

詩集「虚無と白鳥」に就て

薇 薔 亭

○オールド・ホリオ氏

一九二四年に於いて返は美くしい假面をかむつた英吉利風の小紳士であつた。袂に抱へた胡弓からは爽やかな風が流れた。それはラッポと思はせたり公園に近い病院の一室に見る機なオルゴール入りの時計を思ひ出さしめた(端西製でもなければ、小學唱歌も歌はなかつたが)しばしば彼の妻は古風な教會の道に没てゆつた。その時代にあつて彼は僅かに一箱の詩篇を公開したのみであつた。この時代にあつて象徴主義は華やかなる粉飾を盡して若し人の心を引いた(辻野のやうに)

一九二五年以降一九二七年に於いて返を知るものは返自身若しくは、返の日記のみであらう。たゞ私の知つてゐるものは恐ろしく不愉快だと思はれる(音を中心とした音楽と論議(これは社會學でなければならぬ))に近い理智で、慧智に

こゝは明治神宮野球場、内では早明二回戦。その建築のバラスデー

依つて暗闇となつた世界が生まれた。メフィストの假裝衣裳から生れた作品であらうと云ふことだ(いかにしもメフィストはこの掛け物を何う處分しようかと思

こ、明治神宮野球場、内では早明二回戦。その建築のパースデー・タイクに、増集する増集するあぶら虫。

飛行機

子守唄の必要もペロナアルの處方箋で済まされる。現代人は搖籃を持たない。

安眠したかつたら飛行機に乗り給へ。

郊外電車

何處のトラックにも、彼女程美しいスプリンターを見た事がない。並木は一齊に明るく彼女の健康を祝福した。躍走、躍走、躍走。

飛行船

きの娘だらう、あんな所へ忘れて来たのは。薄褐色の流行靴下を？

新イソツブ傳

R・Y

尊敬すべき先生方には亦は卑屈なる戦手に

★イソツブ戯詩をもつて
幼童の歡心を貰ふこと

太陽の輝やかし朝の刻に幸ひにも動物園の諷詩作者は誕生した。渠は頗も落ちた驢馬のやうな男であつたが生れると全時に愛すべき奴隷として名實ある歴史家は我等に紹介した。亦是學校の先生は修身の時間に眞實らしく幾つかの諷詩を讀み上げた。

(或る時沙漠の中で……………)

(或る河岸に……………)

(或る野原の出来事ぢや……………)

僕達は喝采した(莫運氣た兎もあつたものだとか獅子は強いからあの肉は獅子のものだとか)かくも愛すべき諷詩作者は太陽の輝やかし朝の刻に死んでしまつた。動物園の思ひ出をもつて希臘と共に

★百の戯詩王フレリッスの
意に叶はつて夜過げをする

この高貴なる奴隷フリジャヤ人イソツブは王様の前で身振可笑しく例に依つて得意な物語を初めて居たが。王様は決して愉快にはならなかつた。(この奴隷で、曲藝も出来ぬ癖をしよつて高慢な)と新聞記者なら噂を街一ぱいに擴げた處だ。

イソツブは、つまらなさそうに亦一度

依つて暗闇となつた世界から生れた。メフイストの假裝衣裳から生れた作品であらうと云ふことだ(いかにミューズはこの捧げ物を何處で分しようかと思案をなした)

一九二八年に於いて渠はエナメルと洋銀のフアッションを認識することを知り始めた。これは極く真鍮に正常なものと渠は云ふ。渠は陶器と美事に破壊し、歴史は巧妙な手段をもつて抹殺した。即ち渠が渠自身の描いたやつたのである。新しい日の爲めにオリド・ホリオ氏はセルロイドの煙草箱からジャン・コクタウ新案のエスフリ・ヌーボオを汲みさうとせし。渠は明日最新式の衣裳に身を飾らうと云ふのだ。

◇詩集「虛無と白鳥」はこの轉換を説明する爲めに重要な役目をする筈である一九二四年に於ける、一九二五年以降一九二七年に於ける詩的經歷、一九二八年に於ける脱皮を正しい裏書をする。オ・ホリオ氏の證書であり説明書を求めるものでなくてはならぬ。

渠はこの詩書を發表するにあつたつて「憂鬱になる」と云ひ「憂鬱が輸入つてゐる」とも云ひ「傳統的詩生活が終りに告げる」と云ふ。我々が興味を以つ三つの言葉は諸君の前にどんな瞬間を展開するであらうか。(別項十四頁参照)

全じ話を繰り返へした。

(誰れも笑はなかつた。)

イソツブは夜過げをしたいと考へたのは渠一生の立派な行ひではなかつたた

★イソツブ酒屋の主人、
喧嘩して最後のこと

アテネの街でイソツブは何にか一ぱいやつたらしい、シリ、ーの葡萄でも摘みながら……………(處が一等惡かつた事に夢の穂印の金貨を持つて居なかつたのだ。)得意な詩一句を酒屋で書いたが、主人は怒つて渠を振り付けた。コンペハーゲンやニューヨークの動物園を夢見た程、そして渠は詩なんて金にならぬと思ひながら自分て墓へ入つて行つた。

フランス・カルコニ章

春山行夫

AIX-EN-PROVENCE

熱情的な顔をした美しい詩人的なAIXの町

シカール

プラタナスは太陽に空徹されて夕暮のなかに凝固してゐる。微動だにしない。町は物思ひに沈み、混亂した場末や廣場とは別物のやうだ。この沈黙のなかに人びとは自らに還る。そして珈琲店もまたこの冥想にこゝろ傾き、美しい藤製のながい肘懸椅子と、玻璃の杯の中に珍奇な夢の碧空を凝縮するかと思はれる茴香酒とを捧げる。だがなんと、いふ哀愁が君に浸みわたり。なんと、いふあつ胸に君はまぎらる。思ひやり深い、肘で長椅子によりかゝるのであらう！ いまは身じろぎもならない、手をうごかすこともならない、またまばたきすることもならないのだ。

私のパイプがたら迷ふ。

そしてつねにプラタナスのやほらいだ黄金と緑の堂母の下影にはルネ王の彫像があり、夕暮のなだらかな噴泉のひびきがきこえ、水煙かあたりを罩めてゐる。冷水と暖水の噴泉のそれである。黄昏は刻々に輪廓と形象と姿態の錯雑した韻調をあらはし、時のまゝにその身振を變

凝結器

(極く小型のそれも壊れた………)

暦本

◆今年は十三日と金曜日の重なる日が二度もある。一個月に日曜日の五度もあるのが六個月もある。そのうへ月蝕が一度つゝ、おまけに四年で、太陽の黒點が多いと云ふのだから大變に暑いと書いてある

(文明と云ふのは復讐になることだ。)

星座

◆僕は電車での歸へりに天文を見る。星座早見表と引較べて若しか間違ひはなからうかと。

神士

◆渠は髪をもつてゐる、胴と脚とは圓筒だ。留金のやうに鉤が並んで白い手袋からは洋杖が生えてゐる。薄い口からは立派な言語が流れる。時としては煙も出る。若しも渠が自動車に乗らないで脊に折り疊んだアルミナムの翼で飛ぶならばカンラすらも天使の類と思ひ遊びをするであらう。

詩神

◆僕の哀れなことは詩を書くことだ、詩を書くことに依つて悲しませる。僕のミューズは形像ばかりだ。何も判つたことではない慰撫なる捧げ物すら聴しめさぬばかりか、ときどき蹴りつける!!

競技

◆戀愛は勇ましい、昔からスポーツの一種だ。お互がハート型のスコア・ブツクに今日の試合を書き出す。

月光

◆月の光で詩を書くことは非常に困難なことだ。儼だらけの舊

へる。私はものうい靴底をかきむしる。粗いひかりのなかでものおもふ女たちの撫肩に触れた髪毛がみだれくづれる。そんな悪感か女たちを襲つたのであらう。もはや彼女たちも、それ以上、腰を捻げ、色蒼白め、弱々しげにやゝひきつけて長椅子の凹みに蹲ることはないであらう彼女たちも、私同様、夢の杯をまへに、驕傲な幻影の足場を組んでゐたのである。

九月の花薔薇は女たちの胸に散り、秋と夕暮の思ひ出に傷いた木々も、また時折落葉の網をうちひろげる。

いまにして、なべてのものは象なきものゝなかに消えひとは夢に溺れてゐるのに心づく。まことに憂はしき慰藉。かくてわれら行暮れて、町のうへに御告げの鐘のひびくとき、地の涯に覆へる臨終のひかりのなか、落ちきたる落葉とともに、果もなく離散せんかな。

郊外

小徑が亂雑とした刺棘のくさむらと、水に濡つたたかいボラのあひだを縫つてゐる。左手は蒼白め、楊いろに展つた收穫季の、または耕された田野である。右手には川が延びてゐる。それは波のうごきの陰気な水面である。風が水をめぐる木々を鳴らしてゐる。

なんといふ夜であらう！ 午後からの雨がやんだし。あつた冷たい土の香いが咽ぶ。落葉の群が秋をまへにしてをの、いてゐる。そして灌木の生垣が途絶えると、狭い瘦地だけが鐵道の築堤に劃られてゐる。

月光

◆月の光て詩を書くことは非常に困難なことだ。傷だらけの舊式な月の下で考へるなと云ふのは……しかし思ふことは、あの流行もない月の裏側が一度だけ見たいと云ふ願だ。

數學

◆惟ふに最初の數學は獲物の分配か、妻を數へる刻に始まつたものらしい、近世に於いては唯一つ全集本の頁數にのみとゞまつてゐるのは確かだ。

食事

◆葡萄酒と紅茶、胃の中に黒液が出来る（注意をいたしませう）

この哀れな物語を

我が慰養せる先生なる

ヴェネト・イラダン氏に捧げる

テオフィル・ガラン

大岩寫眞場

東屋坂松屋古名

番一四二局用話電

孤獨

犬飼稔

シネマ、パレスから塵芥のやうに吐き出されると外は冷たい十月の風だった
街の飾窓は自棄に明るくきれいだつたが

雑踏に踏みつけられる僕の影は危しかつた

僕は誰かに話しかけたい心でいつばいだつた

不埒なジエネビエーヴの救ひのない(?)救ひについて

こんなにも遺溺ない人生があつていいものか

馴染みのない貌ばかりが僕の背後に滑えてゆつた

カツフェ・リラの扉の前を僕は異邦人のやうに通り返した

美しさ 明るさ 華やかさを怖れる心が僕にあつた

ジャズのレコードのやつと聴えなくなつた所で

そいくさと僕は煙草に火を点けた

遠くに公園の噴上が僕を招んで居た

だが もう僕の口笛は鳴らなかつた 泪が頬に凍てついて

氣がつくと僕の影はもう何處にもなかつた

そして雑踏も 灯も 街も

註 ジエネビエーヴは 佛ゴーマン映画「ふもと」のヒロイン、「ふもと」はラマルティヌの詩篇を映画化したものである。

記念

折戸彫夫

奥さん

貴女の御心を香ばしい絹紙にくるんでしまつて置きませう

記念のために……

まるで婚禮の花束の様なわ

ても白い襟飾を結んだ花郎が見えないわ

淋しい花嫁の姿です。

華やかな饗宴は終わりました。

懐い三十が始ります。

舗道

「^{ガッパ}自動車^ををそういいましようね
『有難う。』」

戀

舗道

香水舗の飾窓

又しても並木路を^{アツキミ}

雨が華手なバラシットを傾けて通り過ぎる、

我等の戀の様に……

風障碍子をかすめては消えて行く

インノセントな白い雲と

我等の戀

——そして又車輪を打つ風。

やがて又、街角の遠い空に
二人の接吻が寒く明るい音を響かせて
別れをつける。

秋

風を荷なうて落葉の町を疾走する
キヤデラツク

詩と詩論

年四四四行

あなたの頭脳は整理される
この冊子に依つて・明日の
魔術をあなたは知るでせう正しい詩の總てはこの冊子
に依つて生み出される

東京四町區下六番町四八

厚生閣版

拜星教に就いて

この論文を録載する友人達に

龜 山 巖

これは天體航空術の物語である。

◆サバイズム(Savayism)と云ふ魔術宗派を中心に往昔、亞拉比亞の砂の裡に日月や星の浪漫な旗を掲げた民族がゐたらしい。渠等は埃及系の天文學者ピタゴラスやプレトミーの兄弟が孫にあたる天空に繰りある集團であつた。

◆サバイズトはかの難解なるスエーデンボルグ、カント、ヘーゲル師などの宇宙創元説を考へなかつた、かゝつて埃及創元記の如く天體を一匹の牝牛、亦是家鴨だとも考へなかつたし、我が地球を希臘や中古の學徒ボラトス、ヘレオードの論説に於けるが如く平面なホット、クーキ型のものだとは思つてゐなかつた僕の知つてゐるのは砂と水を以て形成された一つの球ださ教典の一句を紹介すればよいのだ。

註一 エンサイクロペディア、アトミカは實につまらない。
註二 もつと其の彼の3學師はいたゞ生れてはゐなかつた。

◆物語は回教主ハメット一世の魂が一個の電子(Electron)として漂つてゐた。50年前、現在シメツカに近い沙漠の夜に創まつてゐる。

◆その頃の沙漠は音樂の如く美しく、出来て間もない天空には新しい月と星(彗星、頸飾形星群、星雲、流星)が充ち満ちて、少なくとも自然の存在が許された時代、ハッサンと云ふ青年が一人ぼっちで生活をして居た。

◆ハッサンは懶ける事の他に星を眺めると云ふ他に職業と云ふものゝ

持たなかつた。渠は半生を星の數學的價値の爲めに失なつてしまつた即ち天體を數百個に區分して整理をし命名する(あの星は五年間見てゐる動かなかつたから北極星にして置かうと云ふ簡單な推理から)而か彼が星を數へると全時にハッサンの周圍には澤山の人達が住む様になつた。そして部落を作り小奇麗なテンプルを建設しやがては一つの市街を製作する。が彼には何處から集まつて來たものか考へる暇さへなかつた、彼自身、星の名を考へる事のみでも大變な仕事であつたからである。

2

◆彼は老人になつてしまつた、そしていつか彼は群衆の聲に依つて豫言者として街の神殿に起居を移すことになつた。彼は猶星座表の完成と何もない闕歴から人生だとかを摘出し天體の奇象(日月蝕亦是蝕水、聖、エルモの火等々)を巧みに配列して幾千部門に涉る教理を創造した。それを風の無い夜や雨の午後群衆へ讀み聽かせた奇蹟も亦派に誕生した。彼はまた素晴らしい拍手と喝采を受けた。自然はその度ごとに流星、虹の類をもつて應答した。

◆サバイズムは沙漠を汎濫した。儀式は明日と共に完備し夕曉の雲を凌いだ。

◆ハッサン長老は神殿の椅子に腰を下して過去と現世と明日のことを考へてゐた、頭は熱に重い(夢の中では鵠が思ひ出を乗せて星座を馳けめぐつた)

◆聖都は築かれる(豫言は街に流布される)それは七個の圓型に依つて構成され、それぞれ太陽系(Solar System)を以つて命名されたと云はれる。街の四辻にはバイエラ、エンケ、ハレリの象徴碑が建てられ、鋪石、壁等の平面には數千余ある星座が浮彫され、アッシリアと埃及のエログラフィクの混成書體で書かれた物語は、總べての處に見ることが出來た。

◆新しい巫女と鍊星術師は紅海から地中海から興に、略略に乗つて集まつて來た、改造された神殿にはアカデミーが開設されて化學とか物理學に就いて詳細な研究が進められた、私は少し巫女と鍊星術師の生

活を説明して置きた、それは原始的な硝子工場をその儘に描寫すれば

ロノリチックとはなんであるかと、彼は忙がしく秘密の部屋へ降り

活を説明して置きたい、それは原始的な硝子工場をその儘に描寫すれば充分の様に思ふのだが……

アカデミーには曲頭燈、蘭引、埵塙、水銀燈を具へた哲學室があつたその奥に眞赤に焼けたじ形の溶解爐があり、中には水晶、珪石の類が沸騰してゐた、この爐の赤い反光の裡に練星術師等は教典を読み上げながら一句ごとに薪や石炭を擲げ入れた、これが二日から七日間続けられ溶解を待つて聖なる星砂型の鑄型へ注ぎ込まれる、呪文と歌歌を浴し込んで

註3 アラビアン、ナイトに似る傳説の流布され遊行僧等に依つて體系づけられたものだ。

3

さて巫女はアカデミーを中心とした廣場で鑄造された星を聖歌、經文唱、鎮魂歌を唄ひながら眞珠粉を持つて磨きかけた、(この星は神體の象徴として崇拜せられた他に遠く東洋へ輸出された)巫女歌は長い歴史の中に亡びてしまつたが、かなり陽氣なものではあつたらしい。

◆ハッサン長老はこの長い間(約四半世紀)に涉る聖都の生活の裡に大きな発見をしたのだ、星の生産高が著しく減少し、群集は飢を蒐集しすぎた。

◆これは如何なる現象であらう、(少くなくとも哲學の問題ではなかつたか)聖都を襲つたものは東洋劇に現はれる盜賊團でもなければ國でもないかつた、ただ長い時間と共に存在する退屈と疲勞であつたのだ◆練星術師は溶解爐の火の消へるのも忘れて惚れ藥の研究を始めるし巫女達は仕事の星磨を捨て、街へ夜の縁ぎに出かける、ハッサン長老すらもぼんやり星座圖の第九冊目を擴げたまゝ考へてゐた、

◆日曜日が續つく旗が調れる群集は酒場や寄席で車轡な啼て日を暮らす、
◆長老は露臺へ出るとスコルビオの禍災暗黒に就いて下氣味な暗示や受けた、
◆長老は流星に依つて不思議なときめきを受へた、天體航行術アスト

ロノーチツクとはなんであるかと、彼は忙がしく秘密の部屋へ降り行つた、

註4 凡そこの歌は現在パツカに於いて聞けるあるヘデカーの著書に云つてゐる。

4

この歴史は我が日本に崇神天皇の即位せられ、中華民國にあつて西漢武帝の御宇もや、末期、羅馬にはマリュス、スラ兩將軍の爭論火を吐くと云ふ四層一世紀前のことであつた(而し正確なことは云へない歴史と云ふのに記された古代の事蹟は信用が出来ないものだ)サベイレム教團は當時ハッサン長老に依つて再生の道を拓き天空旅行を計畫し教徒の熱狂は聖都に燃へ上つた、

◆幾千の埵塙は精巧な數學に依つて配置されて、パゲダツトからカイロからイエエルサレムから輸入された眞珠、水晶、玻璃、瑪瑙、硝石、金銀の礦石が青と白の炎を揚げて溶解された、教徒は神殿に呪文を唱へて巡り星と月に印を結んだ、
◆巫女、練星術師は眞青な飛行袍に乗つて暗夜を飛び數々の火花を散した、

註5 當時はウルサリム又はイエリシヤリムと呼ばれたがヘブライ語の規則だ。

註6 アンデルセンはこの話を少し知つてゐる。

◆なにが出来るかき沸騰した火と熱は幾千の流れを作つて湖はぎもある鑄型に溢れた、

◆なにが出来たのか?直徑幾千米に渉る圓球形の神殿であり都市であつた、埃及の甲虫が大切に抱へてゐる球はこの物語を思はしめるが全然別なものだ、

◆球の中には祭壇を中心に住居や遊戯場、公園が設備され、羊、駱駝までが引き入れられたと信づることが出来る、この圓球都市は實に完備した空中都市、空中寺、陸飛行都市と呼ばるべき機械であるのだ、
◆ハッサン長老の觀測が終食續き、教徒の神に捧げる歌が沙の上に囁み、巫女の昂い叫びが流れていつた、

西曆四年前、この球型都市に燈火は灯され正月も近い一夜、闇と星の
大空へ浮び上つた、嗚呼偉大なりし夜の乗器よ（朕臨ペン、ハーを
思ひ浮かべよ）

◆冷たい薄明の沙漠には風が人も居ぬサベイズム聖都の上に沙と塵を
埋めて居たのだ、

註 7 ガリバー旅行記の作者スウィフトは何處からこの物語を耳にしたもの
か。

5

而し貴重なる文獻もいまなほ中等學校に於いて教會堂若しくは日曜
學校に於いて中央亞細亞と支那の傳説として語られる、

◆漢武帝の侍臣張騫（かんせき）君命を帯びて天の河捜索隊を編成し浮木に乗
じて漢を發す歸へらざるに及んで天の河に一新星現はる、これ張騫が
雲なりとかや。

◆イエス、キリストのペテレヘムはダビデが牧屋に降誕ましませし刻
¹ 新星中天に耀やけりと。

◆張氏は天の河を探検しないで西蔵を十三年も漂よび歸へつて来た、
キリスト誕生の物語は石版印刷のカードと共に世上に流布される、は
たして彼のサベイズム最後の消息をこの兩文獻に求めるは白痴の業か
否や？とは今宵しみじみと考へることもある、（ポドレエル
も東航した折この話を聞いたものか「世界の外へ」と散文詩で書いてる
る）

新詩集 虚無と白鳥

この詩集によつて皆さんはけふの喜びを知るとせう
この詩集によつて皆さんは明日の喜びを知るとせう

★お茶の時間には、散歩に、化粧室にお備へ下さい★

著者 折戸 彫夫
装幀 明るい佛蘭西好み
飾画 可愛い、婦人像

定價 七十錢
發行所 ウルトヲ編輯所

論評

3月號豫告表

光 二 郎 氏
東 影 夫 氏

コロンタイ女史の情慾論

齊藤光二郎

カタログに就いて

龜山 巖

伯爵の舞踏會

折戸 彫夫

詩集「虚無と白鳥」

大 銅 稔

★エスキース

同人★

詩

近 藤 東

二號から新しい飾畫、挿畫を入れる豫定
定めし皆さんの喝采を得る事を思ひます

◇賣發月3◇

Y R 亭 薇 簪
號九六・英一

プーコスドイレカ

メモラブル・ラリイ

渡 邊 登

プロオド街はずれの破れほちけた樂屋の片隅で、そををかきながら、
 おいたのカリケチュアを誦いて、すっかり涙はつかひはたし、人さし
 指は汚してしまつてひとりて笑ひたくなつたラリイ・シモン。賑やか
 な街の辻で鍍金の指を買るチャップリンや、せはしそに口笛なら
 して自轉車で走つて行く洋食屋のボオイのロイドと仲よしになれなく
 つて、拾つて來た齒車と曲つたゼンマイをくみ合せてはまとまらない
 ノカニズムを作りだして世俗の人から叱られたラリイ・シモン。
 私達の友人は失戀があつたのだと云ふが、最初から彼が戀なんぞ
 出来る男であつたとは思へない。それがたとへニユウオクの面白い
 人々の中からわいたうわきとしても、電文の誤りで日本へ傳へられた
 ものと信じたい。そんな筋の立つた人生が彼にあつたと考へるだけで
 も私達は世俗的なんではないだらうか。ジュウル・ラフオルグはうま
 いことを云つた。慢性孤獨病で死んだ喜劇役者は、見てくれは滑稽か
 つたが垢ぬけのした男だつたと。

御 案 内

◇ウルトラの可憐な弟として齒磨の名の如き「スビ
 カ」があります。皆が一生懸命で勉強してゐる處
 を御覧下さい。名古屋・中區池田町八一長瀬武方
 助刊行 價一〇錢

ア ド レ ス

齋 藤 光 二 郎

名 古 屋 ・ 西區袋町四丁目六

犬 飼 稔

・ 中區米野町牧ノ墓六九

龜 山 巖

・ 中區東田町四丁目四一

近 藤 東

水 戸 市 ・ 上市町一三九二八木沼方

折 戸 彰 夫

京 都 市 ・ 上京區小川通武春小路下ル小谷方

★冊子寄贈 草稿はすべて編輯所へ★

定價1部

10 錢

昭和四年二月一日
昭和四年二月一日

印刷納本
發行頒市

編輯發行者
印刷者

龜 山 巖
河 崎 由 太 郎

發 行 所

名古屋市中區東田町四丁目四一

ウルトラ編輯所